

内外交差点

介護タクシー発祥と経緯のまとめ①

全国のタクシー屋が一度は燃えたビジネスモデル！

貞包 健一氏 (ほほえみグループ代表取締役) 第11/12回

1998年8月にメディスの木原圭介社長が始めたサービスが、いわゆる“介護タクシー”です。他に“福祉タクシー”“介護保険タクシー”“ケア輸送”などの呼び名が存在し、その定義を明確に示す公的なものは存在していませんが、ヘルパー資格を持っているタクシードライバーが、乗降時等の介護を行い送迎するサービスを“介護タクシー”と呼ぶのが正しいと私は理解しています。この介護タクシーという呼び名は、当時西日本新聞の記者である井口幸久氏が名付けたと自身の著書に書かれています。

木原社長の始めたサービスやその後の経過については、北九州タクシー協会内の折尾地区会という末端の同じ組織内で、発祥当時から間近に見てきた私よりも詳しく語る人はそうはいないと思っております。よって、このコラムの最後として、2回に分けてまとめてみました。

「らくらくおでかけサービス・いよいよ(1998年)8月24日よりスタート」というチラシがメディスケアドライバーセンターの始まりです。チラシに記載の料金を以下に示します。

●入会金10,000円 ●月会費1,000円

	会員外	A会員	B会員
移送	通常タクシー料金	通常タクシー料金	1,800円/30分
ケアドライバー指定料	500円	0円	(移送、ケアドライバー指定、介護料含む)
介護	1,200円/30分	700円/30分	

B会員の料金は、移送を含めた時間制になっています。介護タクシーは、移送を含めた一連のサービスであるとの木原社長なりの考えに基づくものでしたが、これについては後に九州運輸局からの指導があったものと記憶しています。上記会員外の料金がモデルになって、全国の事業者採用されることとなります。あくまで私の想像ですが、30分1200円という料金が通院等乗降介助の単位設定に影響したのではないかと思っております。

バタフライ効果というのでしょうか、タクシードライバーが介護の資格を取るという発想は、全国のタクシー事業者にとっても(もちろん私自身も)とても衝撃的で、全国各地で取り組む事業者が増えていきました。私は、

北九州タクシー協会内に「介護タクシー研究会」という組織を作り、多くの乗務員にヘルパー2級を取得させようと動きました。当時、ホームヘルパー養成講座を行っている事業者を個別に訪問し、タクシー乗務員が参加しやすい時間帯での講座を特別に開催していただくようお願いしました。結果的に、3校が応じていただき、北九州タクシー協会内の事業者から募った100名ほどの乗務員が資格を取ることになりました。この時、私自身もヘルパー2級の資格を取得しました。

一方、本家のメディスは、ケアドライバー(メディスが取得した商標)のサービスが新聞等で紹介されたこともあり、そのドライバーたちが崇拝されるような感覚を私は抱きました。その技術を教えて欲しいという要望もあり、ケアドライバーを派遣して教育をするというビジネスも立ち上げることになります。ただ、その費用は弊社にとってはとても高額で、北九州や福岡県内の事業者は独自の研修を行うことになります。

メディスの介護タクシーは、車椅子を利用している方でも、健常者と同じようにセダンのタクシーに乗車していただくことに価値観を持っていたと言えます。そのために、車椅子やベッドからタクシーに乗車していただくまでの介助技術が必要で、そこに多くの研修を積み重ねてきたには敬意を表します。弊社のドライバーたちも、私と一緒に車椅子から抱えて介助する実践を何度か繰り返し、最初に依頼があった時には、心配で私も自分の車で追いかけて見守ったものです。

福岡県タクシー協会では、北九州圏内で100名、福岡市で300名ものヘルパードライバーを養成し、“ケアタクシー”という呼称とロゴを作成し、1999年12月に一斉スタートしました。しかし、タクシー運賃に介助料金も加算されることから、なかなか売上向上には結び付きませんでした。それまで無償で行っていた簡単な介助との線引きも課題でした。ドライバーのサービス向上には役立ったと思いますが、華々しいスタートとは言えなかったと思います。ケアタクシー開始の時期から、介護保険制度の情報がチラホラと耳に入るようになり、介護保険の算定ができるようになるのか、金額はどうなるのか、その動向に注目していました。そして、2000年4月に介護保険制度が始まり、介護タクシーも大きな変革を遂げることになります。

(次号につづく)

